

しばらく観能記を書いていたので、今回は書く気で気合を入れて「国栖」を観て来ました。4月13日(金)宝生能楽堂で鏡仙会定期公演、「藤戸」と「国栖」の二番が上演された能の一つです。会場に着いてみると、何人もの先輩達も来ていらしたので、私は観能記を書くことに、いささか躊躇いも覚えました。これは私の気楽な感想とあって拙文をお許し下さい。

本番に先立ち3月30日、宮本圭造氏による事前講座を鏡仙会で聞きました。能には分類すると歴史劇が約50曲ばかりあり、飛鳥時代を題材にしているのはこの「国栖」だけ。この曲の特徴は能楽五流の中で観世流だけが、明治以降に詞章の一部の文言を替えているとのこと。それは皇位争い(浄見原天皇と大友皇子)が原本では実名なのですが、皇室への配慮をしてかその辺をぼやかす為でした。それを昭和38年に観世寿夫師は演能の際、筋を明快にするため本来の文言に戻されたようです。

以来、今回の上演もそうですが鏡仙会では、私達が手にしている謡本と所々、詞が違って、その点を大変興味深く思いました。追記すると、戦前はこの曲のみならず「蟬丸」「花筐」「大原御幸」も皇室を題材にしているのが上演が自粛(または禁止)されていた時期があったそうです。

### 能「国栖」(くず) 2018年4月13日 宝生能楽堂

シテ・馬野正基 ワキ・館田善博 他 前ツレ・北浪貴裕 後ツレ・鶴沢光 子方・馬野桃 アイ・中村修一 他 地頭・西村高夫 等 笛・一噌幸弘 小鼓・古賀裕己 大鼓・大倉慶乃助 太鼓 林雄一郎

「藤戸」のしんみりした能を観た直後のせい、まず「国栖」になって囃子の音色もワキ達の声も明るく力強いのが印象的。浄見原天皇役の子方の桃さんが床几に座ると、作物の舟が一旦橋掛りに置かれ、漁夫のシテ・ツレ老夫婦が登場。帝一行は大友皇子に追われ、吉野のこの老夫婦の家に来て、食事を所望すると、この老夫婦は根芹と国栖魚(鮎)でもてなす。この辺りの展開はシテの馬野師の豊かな声量、深く趣のある謡に魅せられ、またツレ北浪師の掛け合いも、とても調和していてリズム感やスピード感があり、どんどん話の展開に引き込まれていってしまいます。

帝が供された魚の半身を漁翁に与えると、その生き生きした様子を見て、故事に習い吉凶を占って川に戻すと、魚は元の姿に還って川を泳いでいくという物語。本当に息つく暇もない程、面白く進みます。

そのうち舟は本舞台に運ばれ覆され、その中に子方が入ります。見所からは見えませんので、私は子方はどういう姿勢で舟の中に隠れてるのかしらと想像を膨らませました。寝て?あるいは座って?かと。

そこへ大友皇子の追手(アイ方)が漁翁の家に来て、あの舟の中が怪しいから見せよと言います。ここ辺りからまた、シテの演技は見どころが多く、「国栖」は演劇としてとても面白い。シテ・ツレ・ワキいずれの演者も言葉が明瞭で、よく透ります。天才と言われた観世寿夫さんは能楽堂の最後列に聞いても、声が届いたそうですが、その流れは引き継がれているのだと思いました。

緊張感のある山場を越えると物語はハッピーエンドとなり、後ツレによる美しい天女の舞がたっぷり楽しめました。そして後場。揚幕があがると、蔵王権現に扮した後シテが、橋掛りから舞台中央へと、もう疾走するようなスピードで登場します。面を付けてこの所作は、とても難しい事でしょうが、素晴らしい一言!この日は白頭、銀色の狩衣という重厚で豪華な装束でダイナミックな舞をしながら、浄見原天皇(天武天皇)の治世安穩を寿ぎ、能は終わりました。私を含め見所は満足感が充ちていました。

私は能楽を習い出して間もなくから、当時の私の師匠とのご縁で馬野師を存じ上げ、20年近くなります。馬野師は芸大卒業頃から、すでに若手能楽師として大変注目を集められましたが、特に結婚し、お子様に恵まれ、どんどん芸を磨かれて円熟期に入られたことが今回の「国栖」でも良く分かりました。

能のオフの時は冗談も言う気さくなお人柄でも、芸に関しては妥協を許さず精進されている故と深く感じ入りました。海外公演、新作能でもご出演が多く、ますますのご活躍を期待しています。